

徒然草

日常における「接点」が鍵

白石邦広

専門家（業務調整／研修計画）

ヘルツェゴビナ国際観光コリドー・環境保全プロジェクト」

ボスニア・ヘルツェゴビナ国

ボスニア・ヘルツェゴビナ国のモスタル市に観光促進の案件専門家として着任して早1年半が経過した。着任する際には当然の事ながら本邦において色々と情報収集を試みた。しかし、結果として当地での生活・活動を具体的にイメージするに至る情報は見当たらなかった。更には、検索で登場する当国に関する情報の多くは「紛争」「内戦」「傷跡」「民族」といった、どちらかという不安な印象を与える言葉が多かった。他は、これらを少々前向きな表現にした「平和構築」や「民族融和」といった装飾が施された言葉である。観光促進の手伝いをしに行くのにこれはどうしたものかと暗中模索しながら着任をした事を覚えている。

90年代の争いがもたらした1つの結果であり、現状、先に述べた「民族融和」を困難にさせている事の1つとして「各町に住む大多数の“民族”が確定した」という事実が挙げられると思う。例えば、ヘルツェゴビナの玄関口でもあるコニツ市はイスラム教を信仰するボシュニク人の住民、クロアチアからの玄関口であるグルデ市はキリスト教を信仰するクロアチア人の住民、等々。これは私が居住しているモスタル市も同様であり、現在はボシュニク人の住民とクロアチア人の住民が各大多数として居住している。「各大多数」という表現は、モスタル市は美しい群青色をしたネレトバ川で町が二分されており（実際の“境界線”は別に存在するのだが）、川の西側（ボシュニク人の住民が主体）と東側（クロアチア人の住民が主体）と紹介される事が多いためである。それぞれの側に病院、郵便局、バスターミナルが存在し、日常の全てが完結するようになっている。私が着任した際にも「川の反対側に行く必要は今まで無かったので、行ったことが無い」と話をした人間が両側に存在した。

しかし、そうであるからと言って、このモスタルという町が完全に二分化されており、現在もボシュニク人の住民とクロアチア人の住民がお互いの日常的な触れ合いを否定し合っているわけではない。天候が良ければ西側のボシュニク人の住民が東側にあるスズカケの木の並木を散策する事だってあるし、東側のクロアチア人の若者が西側にあるバーに夜出かけたりすることもある。更には、2年程前に東側にできたモールの存在も大きい。このモールでは“このモール以外では（西側・東側関係なく）入手できない”品々（主にブランド品の洋服等）が揃っており、常に様々な背景をもった人々が入り混じって時間を楽しんでいる。モスタルから2時間程離れた場所にあるトレビニエ市（セルビア正教を信仰するセルビア人の住民が主体）の住民もこのモールで買い物を楽しんでいるのである。

このような事実を日常的に肌で感じるにつけ、様々な援助機関が「平和構築」や「民族融和」といった言葉を表に出し、様々な活動を展開している事実には違和感を覚える時もある。勿論、「平和」という状況を現実のものとするために積極的に働きかけないといけない状況（武装解除、地雷除去、等々）も存在するのかもしれない。ヘルツェゴビナにおいても地雷除去は継続して実施されており、観光振興を促進する立場からも今後も継続・促進されるべき内容であろう。また、昨今の洪水によって、倉庫に匿われていた武器が流れ出た、という報道もあった。この国がまだ「平和」という状況を手に入れる過程にいるのだ、という事を意識させられた瞬間であった。

それでは争いによって人為的に分断されてしまった人々の関係はどのように対応するのが良いのか。当然、“昔住んでいたところに戻ってください”という取り組みは（一部の地域において一部のドナーによって行われているが）非現実的である。実際に、海外からの支援を受けて建設された立派な家が利用されず、空の状態で存在しているのもこの目で確認をした。モスタル市においては「自分の親族は対岸の誰それによって殺された」という事がまだ鮮明に西側・東側の人々の記憶に残っている。そのような状況に対して「それでは両岸とも手と手を取り合って未来を築きましょう」というスタンスで仕事をする事自体が困難であり、むしろこのスタンスは地元住民からの自身を敬遠させる事に繋がる。援助機関が謳う宣伝文句は、時に活動資金を得るためには有効であるが、時に現場活動を推進するためには役に立たない所か逆効果である事を学ばされる。

話はモールに戻るが、このモールの存在から学んだ事は「いかに自然に存在する事が重要であるか」である。案件がこの地で直面する課題は決して目に見える程に単純なものではない。それは地元の人々の経験であり、その結果、精神・感情に根付くものである。これらに対して直接的な処方箋は存在しない。出来る事は寄り添う事だけであり、可能な限り自然に、当たり前のように、日常的に、様々な人々がお互いに存在し、接点を持つような場を作る事。更には、そうした接点を持つような場所を出来るだけ沢山、日常に含ませる事である。モールだけでなく、前述の“スズカケの木の並木”もこうした接点として機能している。

最後に、私が携わっている観光促進の案件である。当初は「平和構築」の文脈で案件が形成されたようであるが、現在はより観光業に携わる民間セクターへの支援という色が濃くなっており、方向性は間違っていないように思う。様々な背景を持った人々がこの案件の活動を介して自然と相互に接点を持ち、ヘルツェゴビナの観光業界をリードし、観光業を促進する事に繋がるよう、心がけて活動している。